

土門拳

Domon Ken

エ
ッ
セ
イ
集

写真と

人生

同時代ライブラリー

321

阿部博行編

岩波書店

工
十
門
拳

エ

イ

集

江苏工业学院图书馆
藏書章

Damon Ken

写
真
と
人
生

阿部博行編

同時代ライブラリー

321

岩波書店

写真と人生

[同時代ライブラリー 321]

1997 年 10 月 15 日 第 1 刷発行
1997 年 12 月 1 日 第 2 刷発行

著 者 ^{ど もん けん}
土 門 拳

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
同時代ライブラリー編集部 03-5210-4136

印刷製本・精興社

¥1100

© Ken Domon 1997
ISBN 4-00-260321-0

Printed in Japan

凡 例

- 一、旧漢字を新字におきかえ、旧かなづかいは現代かなづかに改め、新たに振りかなを加えた。
- 二、明らかな誤記、誤植は訂正した。
- 三、読みやすくするため一部改行を入れ、句読点を整理した。
- 四、民族、職業、身体障害などに関する不適切な表現があるが、原文の時代性を考慮してそのまま使用した。
- 五、土門拳の写真作品については、『土門拳全集』（全一三巻、小学館刊）、土門拳記念館（酒田市大字宮野浦字飯森山北一三番地）に収められている。

カバー・写真デザイン|| 間村俊一

目 次

目 次

戦前の土門

自分のこと	2
作者の弁	10
慈航今何処	13
呆童漫語（三）	17
文楽私語	27
対外宣伝雑誌論	42

戦後の出発

友 へ	52
画家の手	61
法隆寺善住院にて	64
カメラとモチーフの直結	68
リアリズム写真とサロン・ピクチュア	73
梅原さんを撮す	82
『風貌』序	86
武田麟太郎	89
仁科芳雄	91
阿部次郎	93
宮本百合子	95

室生寺ひとむかし	98
社会派写真家として	
理由のない恐怖——十三年後の広島	106
魔性のツメ跡に怒り	123
だれにも知られずに	124
筑豊の姉妹	126
著者のことば（『筑豊のこどもたち』）	129
治安警察無用論	131
るみえちゃんはお父さんが死んだ	134
筑豊のこどもを思う	142
「マグナム展」のつまらなさ	147

病後の活動

やはり城は遠くから見るもの	156
やきものへの開眼	159
秋草文壺のふるさと	165
酒と私	170
和　　釘	174
木地山を訪ねて	178
執念 しゅうねん の木理 もくめ ——屋久杉物語	184
ままにならぬ右足	191

古寺巡礼

『古寺巡礼』第一集まえがき	198
---------------	-----

『古寺巡礼』第一集あとがき	203
唐招提寺の火叩き	213
神護寺遺芳	218
走る仏像	223
浄瑠璃寺雨情	225
中尊寺一字金輪坐像面相	229
『古寺巡礼』第五集まえがき	232
車椅子からの視点で	
一年ぶりの撮影	240
『風景』あとがき	242
『土門拳自選作品集』自序	245

	またまた室生寺を……………	248
	『女人高野室生寺』あとがき……………	252
	白い石、さわらぬ神にたたりなし……………	257
	『日本の彫刻』後記……………	260
解 説……………	阿部博行……………	265

戦前の土門

傘を回す子供



自分のこと

僕は明治四十二（一九〇九）年十月二十五日の夜十一時半頃生れたそうである。庄内米の集散地として知られた山形県飽海郡酒田港の住宅街の一軒に呱呱こごの声をあげたのである。別に靈夢を見て孕んだわけでもなければ、鎮守様に願をかけたわけでもなく、父母の平凡にして熱烈なる恋愛のいわゆる愛の結晶として生れたのである。この結晶は生れつき色が黒く、甚だ意地ばりであった。一旦腹いったんを立てて泣くと真赤というよりは赤黒くなって泣いて、容易に泣きやまなかった。なだめすかしていた母も終いには怒ってこの愛の結晶たる僕をよく畳へ投げつけたそうである。母は酒田の船宿の娘、父は会社員であった。

僕の名前のドモンケンを知らぬ人はペン・ネームと知っているらしいが、本名である。土門という姓は酒田地方に何軒か散在している土着の姓であるようだ。拳という名は大体家が没落士族の果で貧乏であったから、徒手空拳以て身を立つべしと父が激励の意味で名付けたというのだが、後に本当にその通り辛い人生を生きなければならなかったのは、誠に名は体を表わ

すとかやで、世の親たる者息子の名を付ける時は余程考えなければいかんと思う。尚、小説家林芙美子さんは「あの人は沖繩県人でしょう」と噂したと聞いたが、僕の産地も原籍も前記のように南と北とは反対の奥州は山形県である。このことは今後僕という男の性格と仕事を考察する上に仲々必要だと思うので明記する次第。

冬は低く垂れこめて晴れる間もない雪空と日本海の鉛色の海の白い波がしら、桃も李も桜も一時に目の覚めたように咲き出す春、夏の紺碧の空にくっきりと残雪光る鳥海山、この北方的な自然に抱かれて、結晶はすこやかに成長した。色益ます黒く、目玉ギョロリと、鼻汁を拭った紺の袖口がテカテカに光っている一個の日本男児となった。僕が街角に立ち、昂然として「集まれ！」と叫ぶと、あつちの家からこつちの露地から餓鬼共が、同年輩はもとより小学校へあがつている大きな奴等まで、ゾロゾロと集まって来た。僕はこの乾分共を駆使していたずらの限りをつくした。

大正三（一九一四）年、僕の六歳の時、第一次世界大戦は勃発し、その十一月七日には青島が陥落して、酒田の町は「大勝利」祝賀の山車や仮装や提灯行列で割れるような騒ぎであった。僕も子供心にもいささか祝意を表したくなった。床の間が偶然掛軸をはずしてあつて淋しいのに目をつけ、その白い壁一杯に交叉する日の丸の旗を墨痕淋漓と揮毫した。そして僕はこの大作に至極満足して眺めているところを祖母に発見されひどく叱られた。祖母は大きな掛軸をか

けて孫の犯跡をカバーしたが、掛軸の左右へ先端の玉と旗竿の下がニュツと出て如何とも仕様がなかった。然しその後お客様の間ではその掛軸の絵よりも僕の「大勝利の旗」の方が評判がよかつたように記憶している。

大正五年の春、生活の打開をはかつて一家東京へ出ることにになり、八歳の僕は伯父につられて上京した。田舎者の伯父は汽車の窓ガラスを閉めることが出来ず、上野駅へ着いた時は僕はすっかり風邪を引いていた。先に上京して下谷谷中の裏長屋にささやかな生活を始めていた父母は、僕のために赤い金魚を一匹買って置いてくれた。知らぬ土地へ来る僕のための友達にという思い遣りであつたのだろう。その小さな金魚は縁側に吊下げられた丸いガラス鉢の藻草もない透明な水の中で佗しげに息をついていたが、それも二、三日で死んでしまった。

小学校は麻布飯倉小学校へ入学したが、二年の秋、父母について横浜へ移り、卒業したのは横浜二ツ谷小学校であつた。家の生活は相変らず苦しかったようで、尋常五年の時、何かのシヨックでか「何糞、貧乏に負けてたまるもんか、貧乏でいじけてたまるもんか」と一人歯を喰いしばって決意したことがある。その言葉が今でも時々僕の心の底で呻くのは、つまり僕がいまだに貧乏であるということであろう。それでいて今日まで遂に一度も金儲けを志さなかつたのはよくよくの貧乏性というものであろうか。

中学校は神奈川県立第二中学。口頭試験の時「将来の志望」には画家になると答えた。書画

骨董を趣味とする父も僕の画家志願には徹底的に反対した。そのためによく衝突した。そのうち父は病気をしたり失業したりで、母が看護婦をして働いているだけではやりきれなくなった。二年の秋退学して家具屋の小僧に行くことになった。それを教師の中であれば将来絵でもものになるかも知れんからと説く人もあつて学校は月謝免除の特典をはからつてくれ、教科書などを心配してくれる教師もあり、それでとにかく学校はそのまま続けることとなり、遂に僕は中学をただで卒業することが出来た。そのことは今でも非常に感謝している。

三年の時、父の女の問題で母と僕は家を出、それから母子二人の苦闘の生活が始まった。それ以来今日に至るまで實際母には苦勞のかけ通しである。母は常にその大きな愛を以て僕の氣持の理解者であり、行動の支持者であつた。僕は何人にもましてこの母に感謝すべきものを負うている。その後、僕は絵に対する熱情は段々強まるばかりで、僕は学校へ行く振りをしては野や山で写生に過し、雨が降れば横浜図書館へ行つて美術書などを読み耽つた。当時の美術・文化・歴史関係の蔵書は殆ど読んでしまったといつてよい。油絵を描いていながら興味は東洋美術関係に集中していた。文学では志賀直哉に傾倒した。その時分の級友に今別府の脳病院長をしている塩崎淑男とか、満洲証券の出田孝一がある。

昭和三(一九二八)年、中学校卒業。その後二年ほど逋信省倉庫人夫として働きながら、一人で絵を描いていた。顧愷^{こがいし}之の「女子箴図卷」を突込んでいるうち、遂に俺の才能では一生かか

つてもこれだけは達せられないという悲観に達し、落莫たる煩悶の末、年来の画家志望を断念して絵筆一切を折った。今そのことを反省して見るに、何もそう短兵急に芸術なり才能なりを割切ってしまうずに、そのままジリジリ押して行けば、案外道は自ら開けたかも知れないのと思うが、とにかくその時は芸術という絶対的な壁に突当って、そうした切迫した解決をしか取れなかった。

その後人夫をやめ、常磐津三味線弾きの内弟子を半年。弁護士事務員を二年半、その間に日大法科の夜学に籍を置いたりしたが、講義には一日も出席したことはなかった。それから農民組合の書記見習を半年やったりして、風のわくほど長い間「ブタ箱」に入っていたこともある。それも辞めて、親切な伯父の家の居候となつたものの、さて世は所謂失業氾濫時代、百方奔走すれども僕のような半端な人間を使ってくれるところなどあろう筈はなく、前途の方策も自信もなく、暗澹たる絶望的な日々が続いた。

既に僕から絵というものを取去つた瞬間から実は生きて行くべき力の泉を自ら涸らしたというものであつたかも知れない。しかもまだそれに代るべき新しい泉は掘り当てていず、鶴嘴を打込むべき方向すらもわかつていなかった。何度も自殺を考えた。然し死にたくて自殺しようとするのではなく、いわば目前の窮迫と失望に顔をそむけたい弱気と感傷でしかなかったから、遂に死なずに今に生きている。自殺を真剣に思込んだ時、自分は死んでも母だけは未永く元氣